

BOOK REVIEW

爆笑問題の日本の教養 科学的分身の術

爆笑問題 + 舘 暉 著

講談社 ISBN978-4-06-282617-4 2008年発行

評者：安藤英由樹（大阪大学）

この本は、舘先生が思い描く「バーチャルリアリティ学」について述べられている。それは、単なる研究紹介にとどまらず、なぜバーチャルリアリティやトレイグジスタンスという研究分野を舘先生は選択したのか、そして、科学論と技術論、さらには幸福論といった舘先生個人としての研究者の価値観や世界観にまで踏み込んだ内容となっている。文体としては、専門家ではない一般的な視点から爆笑問題の太田氏と田中氏の二人が舘先生に質問しそれに答えるという構成であり、読むということに関してはなんら苦勞することはない。私自身、舘先生の弟子

の一人であるので、研究内容については専門的に知っている。つまり、一般人（爆笑問題）と専門家（舘先生）のやりとりを再び、専門家（私）がこの本を読んであれこれ考えるというのはなんとも複雑な感じがしたわけだが、時折科学技術や研究に対してわざとネガティブな質問をぶつける爆笑問題（特に太田氏）に対して、自分だったらどう答えるのだろうか？果たして、舘先生のように自分のアイデンティティの中から回答を述べるができるだろうか？と終始自問自答しながら読み進めた。前半は主にトレイグジスタ

ンスの話である。普段からこの分野にいる私には、自分自身を別の場所から見るといふこの視覚トレイグジスタンス体験が不思議な感覚であることを知っている。このため初めてこれを体験する芸能人がどう反応するかということに注目がいく。勿論「驚く」というリアクションについては想像に難くなかったが、舘先生自身が30年前に初めて見たときの驚き、「自分を見ている自分の後ろ姿が目前にあり、それを見ている自分はいったい何であるかと自問する」というやや哲学的な記述には共感を覚えた。このような記述は論文や解説書に書かれるようなことではないが、バーチャルリアリティ研究においては思考の中で予測されること以上に不思議な感覚、おそらく脳の潜在的な部分が直接感じてしまうようなことに

起因する驚きが往々にして起こる。このような経験こそがその後30年にわたってバーチャルリアリティ学を進歩させていく研究の原動力になっていったのだろうと私は思う。トレイグジスタンスの研究は一見すると工学的側面が強く見られ、産業的応用ばかりにその方向性が強く働いているように思われがちである。ここでサブタイトルを読み返してみると「工学的分身の術」ではなく、「科学的分身の術」であるということ気がつく。私が思うに、ここまで舘先生が作り上げてきたトレイグジスタンスの装置はあくまで生活を豊かにする便利な道具を目指して研究さ

れたものであるが、その奥底に必要とされているものは人間そのものの本質を知るといふことに他ならないということ強調しており、近年目の成果にばかりとられすぎている工学研究、産業応用に対して科学的側面からの視点を今一度持つべきではないかと強く感じさせられる。さらに、科学技術の発展が、果たして人間を幸せにするのかという誰しもが思う疑問、研究者は自分がやらなくとも誰かがやるからとその言訳をすることなどはよくある話だが、舘先生はこのよう

な問いに対して、「科学技術が発展していく過程において発生する危険やリスクは増すだろうが、このリスクを回避した暁には、何もしなかったよりも望ましい結果が待っているだろう」と我々を勇気づける見事な回答を与えてくれる。このように本書はバーチャルリアリティの解説本というよりはバーチャルリアリティ学先駆者である舘先生の思想をかいま見て読者自身がVR系研究者とは何かを考えるのに最適な本である。最後に個人的感想ではあるが、爆笑問題との文面を見ていると時折、唐突に舘先生によって話題が変わっていく描写が見受けられるが、私もかつて舘研究室のミーティングに参加していたこともあり、舘先生自身の議論したい内容に話を引き込もうとする時こういったやりとりがあったことを思い出し、懐かしさを覚えた。

